
殺人者のたわごと、そして微笑 その3

青木弘樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

殺人者のたわごと、そして微笑 その3

【Nコード】

N4256J

【作者名】

青木弘樹

【あらすじ】

資産家を狙った連続殺人事件が起こった。
しがないライター清田は、事件を調べることになるが、偶然の出会いが彼自身の運命をも揺さぶることになる。
清田は犯人を突き止めることができるのか、？

作：青木弘樹

翌日。

清田は出かける用意をしていた。一応、威嚇のためにサングラスをかけていた。身の危険はないだろうが、油断は禁物だ。清田は気を引き締めて家を出た。

午後二時前。清田は北オリオンビルの下に着いていた。

相手は黒い帽子をかぶつてくるといふ事だった。清田もこちらの服装の特徴を簡単に伝えていた。

そして、

「清田さんかい？」

黒い帽子にサングラスの男が現れた。

「あなたが情報提供者さん？」

「ええ。まあね」

なんとなく見たことがあるような人物だったが、清田は思い出せなかった。

「それで、どんな情報があるんだい？」

「実はね、、、あの殺人事件の犯人を、、、俺は知ってるんだよ」

「！？」

清田はサングラスを外した。

「本当か、、、？」

しかし清田は内心、信用していなかった。

「ああ。ん、、、？あれ？あんたは、、、？」

「どうした？」

「あんた、たしか、この前俺に煙草を一本くれた人だよね？コンビニの前で」

男もサングラスを外した。

「あつ！君は、、？」

そう。男は数日前、清田が煙草を恵んでやった男だった。それはつまり、この事件の犯人だ！もちろん、清田も周りの誰も知らないことだが。

「あんただったのかい。世間は狭いねえ」

「そうだな。職安へは行ったか？」

「ええまあ」

「そうか。しかしその話はどうでもいい。問題は例の事件についてだ」

「そうですね」

男はいったい何を言うつもりなのだろうか？まさか自分が犯人だと告げるつもりなのか？

「いやね、まあ確証があるわけではないんですがね、、、たぶん犯人は、、、俺の小学生のときの同級生だと思うんですね」

なんと男は嘘をついた。

「、、、、」

「一年ほど前のことです。俺の同級生、前田直哉っていうんですけど、そいつと久しぶりに会ったんですよ。その時あいつはこんなことを言っていました」

「、、、、」

男の話は次のような内容だった。

前田の実家は小さな電気屋で家族なかよくやっていたそうだ。しかし近所に大手家電量販店が出来て以来、客足は遠のき、二年ほど前に廃業。父親は自殺し、母親と二人、借金に追われながら必死に生きているとの事だった。

「あいつは言っていました。金持ちはすでに裕福なくせに貧乏人をどんどん食いつぶしてくる。絶対に許さない。いつか殺してやる、とね」

「なるほど、、、、」

「それに知ってますか？今回の四件目の事件の被害者。その大手家電量販店の社長の親戚らしいですよ。ネットで調べたんですけどね」
「ほう、、、」

「あいつとは、あれ以来会ってないけど、俺はあいつが犯人だと思うんですよね」

「確かに、、、動機は充分だな」

前田という男の素性が嘘であれ本当であれ、その前田という男が犯人でないことは確かだった。もちろん今の清田はそんなことは知る由もないが。

「とりあえず、あいつの家の住所教えますよ」

「、、、」

「け、けど、俺が言っただけで言わないでくださいよ。そんなことしたら、、、」

「分かってるよ。情報提供者のプライバシーは守るよ」

「ありがとうございます」

男はどういうつもりなのだろうか？わざわざこんな嘘をつくなどと。自分が捕まらないためか、あるいは遊んでいるのか、、、？

「それで、いくら欲しいんだ？まあ、あいまいな情報だから一万くらいが関の山だが」

「お金は、けっこうです」

「？」

「俺は、犯人が知りたい。それだけです。そして犯人が前田だったら止めてほしい。それだけです」

「、、、」

「じゃあ、何か分かったら連絡ください」

「ああ、分かった」

男は去っていった。清田は男のパソコンのメールアドレスはとりあえず聞いていた。名前は太浦と名乗っていたが本人いわく本名ではないらしい。

「前田ね、、、とりあえず行ってみるか」

後日、清田は前田が住んでいるらしいマンションの前に来ていた。県営のマンションだ。

「ここの、C棟の303か、」

現在午後二時。平日なので、仕事に行っていて誰もいないかもしれない。清田は303号室に行き、とりあえずインタホンを押してみた。

”ピンポーン”

「すいません」

返事はない。

”ピンポーン”

「すいませーん」

やはり返事はない。

「留守か。仕方ない。夜に来よう」

清田は帰ることにした。清田はこの情報を下條に言おうかどうか迷ったが、非常にあいまいな情報なのでまだ言わないことにした。

そして夜七時ごろ。

清田は再び前田の住むマンションに来ていた。

「さてと、」

清田は303号室の前に着いた。

”ピンポーン”

「すいません」

数秒して物音がした。

「はい？どちらさまですか？」

男の声だ。前田本人だろうか？

「あの、私はライターをやっている清田という者ですが、アンケートにご協力願えませんでしょうか？」

清田はてきとうな嘘をついた。

「アンケート？どんなアンケートですか？」

「最近の政治についてです」

「変な押し売りじゃないでしょうね？」

「いえいえ。そんなんじゃないありません」

「、、、分かりました。ちょっと待ってください」

”カチャ”

鍵が開いたようだ。

”ガチャ”

ドアが開いた。

「すみません。こんな時間に」

「それで、どんなアンケートですか？変な押し売りだったら警察呼びますよ」

「いえ、押し売りなんかじゃありません。しかし実はアンケートでもないんです」

「どういうことですか？」

「実は、最近起こっている資産家連続殺人事件についていろいろ調べてるんですが」

「、、、、」

男は別段、焦った様子もなかった。当たり前だが。

「それで、いきなりこんなことを言うのも失礼なんですが、あなたの同級生から、あなたが犯人ではないかという情報を聞いたんです」

「はあ？」

「いえ、もちろん、その話を鵜呑みにしたわけではないのですが」

「、、、、」

男は困惑していたが、まったく焦ってはいなかった。むしろ呆れている感じだった。

「誰がそんなことを言ったんですか？」

「それは言えませんが、、、、」

「、、、、まあ、とりあえず入ってください」

男は清田を部屋に上げた。

「失礼します」

「馬鹿馬鹿しい話ですね。けど暇だったからちよーどいいかな」
「すいません」

「で、あなたは何者なんですか？」

「私はさっき言ったとおりライターです。全然、有名じゃないですがね」

「ライターね。ジャーナリスト的なことしてるんですか？」

「まあ多少は、、」

「ふうん。俺の名前も知ってるんですか？」

「ええ。前田直哉さんですよ」

「、、、、」

「その人が言うにはですね、最近殺された資産家の方が某大手電量販店の社長の親戚の方で、あなたがその家電量販店に恨みを持っているようだ、とのことなんです」

「、、、、」

前田は少し暗い顔になった。

「それでお話を伺いたいと思ひまして」

「なるほど、、、確かにその家電量販店のせいで僕の親父は自殺しましたよ。正直殺してやりたいと考えたこともあります」

「その話も聞きました。お気の毒です」

「でも殺したところで親父が生き返るわけでもないし、ナンセンスですよ」

「そうですね、、」

「つたく、いったい誰がそんな馬鹿馬鹿しい、、、待てよ？」

「？」

「確か、、、一年ほど前に久しぶりに会った田代にそんな話したな、、」

「田代？」

「清田さん、そいつの名前、田代じゃないですか？」

「えっと、、」

「俺だけ素性を知られているのは不公平じゃないですか！教えてく

「ださいよ！」

「すいません。実は本名は聞いてないんです。一応、大浦と名乗っていました」

「大浦？2組にそんな名前のやついたな。けど話をしたこともないな」

「、、、」

「あの、ちょっと待っていてください」

前田はそういうと何かを取りにいった。

「、、、」

しばらくして前田が戻ってきた。どうやら小学生時代の卒業アルバムを持ってきたようだ。

「これ見てください」

「、、、」

「ほら、こいつが田代です。こんな顔じゃなかったですか？」

「、、、」

清田はアルバムを見てみた。子供の頃の写真なので顔は少し変わっているが、おそらくそうだろう。

「どうです？」

「えっと、、、」

「清田さん！」

「ええ、、、多分そうだと思います」

清田は根負けした。

「やっぱり」

前田は少し落ち着いた。

「あいつは、ほんとに言いたがりだな。昔から全然変わっちゃいない」
「、、、」

「清田さん、別に疑われてもいいですけど、俺はやってませんよ」

前田は焦った様子もなく、実に堂々としていた。

「俺は正直、田代は好きじゃないんですよね。あいつまあまあ金持ちだし、昔からよく嘘をついたり、人をおちよくったり、性格がひ

ねくれてるんですよ」

「、、、」

「あいつの言うことなんて、あまり信じないほうがいいですよ」

「そうですか、、、」

清田もなんとなく、そんな感じはしていた。

「そうだ。むかつくからあいつの家の住所教えますよ」

「えっ？」

「そんで、言つといて下さい。いい加減ひねくれた性格直せつて」
「、、、」

清田は田代の家の場所を、とりあえず聞いた。

「大きい家だからすぐ分かりますよ」

「分かりました。時間のあるときにでも行ってみます」

「あいつが犯人だったら面白いですけどね」

「ははは」

しかし二人は知らなかった。まさに田代が犯人だということを。

「それでは失礼します」

清田は部屋を出た。前田は犯人じゃないだろう。雰囲気やしぐさから見て間違いない。

「田代健太郎か、、、」

清田は田代の家の場所が書かれたメモもポケットにしまい、やがて家に帰っていった。

数日後。昼前。

清田は田代の家の前に来ていた。

「ここか、、、でかいな、、、」

それはかなり大きな家だった。

「あいつ無職って言ってたよな、、、親が金持ちで親のすねをかじっているのか、、、」

清田はとりあえずインタホンを押した。

”ピンポン”

「ごめんください」

数秒して返事があつた。

「はい。どなたですか？」

「あの、清田です。先日お会いしたライターの清田ですけど」

「清田さん？」

数秒して、大きなドアが開いた。

「清田さん、、、どうしてここが？」

「ええ、実は、、、」

「分かった。前田に聞いたんですね」

「え？ええ、そうです」

「なるほど。まあ、そうなる可能性は考えていましたかね」

「すいません。勝手に来たりして」

「いいですよ。俺も聞きたいこととかありますし、まあ入ってくださいよ」

「そうですか。では、失礼します」

清田は田代の家に入った。

「それにしても、いいお家ですね」

「そうですかね。ただ広いだけですよ」

「お父さんが何か事業でもやってらっしゃるとか？」

「、、、」

「すいません。詮索するのはよくないですね」

「父は、というより両親は、、、交通事故で死にました。半年ほど前に」

「そ、そうですか。それは失礼しました」

「コーヒーでもいかがですか？」

「え？はい。いただきます」

田代は台所のほうへと向かった。数分して、田代はコーヒーを持ってきた。

「どうぞ」

「どうも。では、いただきます。ふう。美味しい」

「、、、、」

田代は無表情だった。

「この間、あなたの同級生の前田さんを訪ねたんですけどね」

「どうでした？」

「彼はおそらく犯人ではないでしょう」

「なぜです？」

「まあ確証はありませんが、雰囲気かね。まったく動揺もしてませんでしたし」

「ライターの勘ってやつですか？」

「そんな大したものではないですが」

「まあ、でもよかったですよ、昔の知り合いが犯人でなくて」

「そうですね」

それにしても大きな家だ。一人で住むにはもったいないくらいだ。

「清田さん、お金持ちをどう思いますか？」

「え？うゝん、そうですねえ、、まあ、うらやましいといえましょうやましいかな」

「俺の父はね、銀行員だったんですけど、たまたま株に投資したらかなり儲けちゃって、まあまあの資産家になったんです」

「へえ」

「けど、調子に乗って投資を続けるうちにお金も無くなってきて、、、、」

「、、、、」

「この家も手放す寸前まで言っただんですけど、たまたま交通事故で死んで、生命保険が下りたんです」

「それは、、不幸中の幸いですね」

「けどね、俺は疑われましたよ。俺は車が好きで車に詳しかったから、保険金目当てに俺が車に細工して親を死に追いやったんじゃないかって。警察の調べたところ、事故を起こす直前にブレーキが故障した形跡があったらしくてね」

「それは気の毒に、、、、」

「親戚とかも、金があるときは寄ってきて、ないときは離れていて、また金を持ったら近づいてきて、」

「、、、」

「俺は考えました。お金って何なんだ？この社会って何なんだ？人間って何なんだ？」

「、、、」

「俺は思うんですよね。もし、お金持ちがみんな死んだら、貧富の差もなくなつて、みんなが仲良く暮らせる世の中がくるんじゃないかって」

「、、、」

「だから正直、今起こってる事件、ざまあみろって感じなんですよね」

「、、、」

「すいません、変な話して。まあ、そんなこと言ったら俺も狙われる側になるんでしょうけどね」

「そうですね、、、」

清田は一瞬、田代の顔が強ばつたのを見逃さなかった。そして少し思った。

『もしかしたら、こいつが犯人なんじゃないか？』と。

その後、たわいもない世間話をした後、清田は帰っていった。

「田代健太郎、、、」

清田はすんどかった。あるいは田代がわざと自分を疑わせるように仕向けたのか？

清田は少しの間、時間のあるときは田代を見張ることにした。

その4へ続く。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4256j/>

殺人者のたわごと、そして微笑 その3

2010年10月8日15時05分発行